



こーひーぶれいく

## 夏の思い出

石原 安野

*Ishihara Aya*

今年は時の流れがいつもの年とは違う。12月号掲載予定であるこの文章を書いている今はまだ夏である。小中学校の多くは通常より短い夏休みとなった。夏休みというと、私が高校生の頃は、長期休みに青春18切符で旅に出るのを楽しみにしていたのを思い出す。

夏休みの準備は夏の臨時列車が載っている時刻表の一番小さい判を購入する事から始まった。青春18切符は5枚つづり、1枚で各駅停車が1日乗り放題という切符である。行き先は、北海道が多くて、九州に行ったこともある。電車好きというわけではないのだが、時刻表を解読して、この5枚の切符でどこまで遠くに行き帰ってこれるか、を試すのは、暇はあるけど金はない高校生の楽しみであり、また冒険でもあった。途中で特急券を買って特急のれば北海道まで2枚で行けるな、とか、特急に乗るのは邪道だ、切りのいいところでユースホテルに泊まろう、とか。いろいろな行き方を、でも、できるだけ安く行くということは譲らずに試してみた。親には、細かいことを言わずに行先だけを告げて家を出ていたの、多分、飛行機で現地に向かったかと思っていたのだと思う。途中のユースホテルから忘れ物が家に届いて、家族は、私は一体どこに行ったのかとびっくりしたと後から聞いた。

インターネットで情報収集ができるようになったのは大学以降の話である。高校生の頃はスマホどころか携帯電話も当然なかった。

時刻表で旅の概要を立て降りる駅が決まったら、ユースホテルのガイドブックで泊まる宿を探し、

そこへ行く駅からのバスの時刻を調べる。家の電話で予約して、バスの時刻や行き方も電話で聞いておく。出費額に見込みがみついたら、次はアルバイトの算段である。高校生の頃の長期休暇アルバイトはもっぱら学童の先生であった。先生と呼ばれてはいたけど、要は朝から元気な子供たちと、缶蹴りをしたり、ジャングル鬼をしたり、将棋の相手をしたり。専任スタッフがやられてられないような、小学低中学年の子供たちとの体力勝負の遊びが主な仕事であった。しかも、子供たちと一緒におやつまで出してもらっていた。

金の算段ができれば、最後に持っていく本を選ぶ。文庫本を10冊ほど。行きと帰りで5冊ずつくらい読む。しばらく前から読みたい本を読まずにとっておく。夢中になって本を読んでいて、顔を上げると、見知らぬ景色が広がっている。慌てて次の駅の名前を確かめる。大丈夫、まだ乗り換えの駅ではない。乗り換え損ねたら、その場合は予定よりだいぶ手前で、今日の旅程が止まってしまうし、そこからまた行き方を調べ直さないといけないので、その辺は慎重に旅をする。おいしいものを食べるわけでもなく、硬いシートの鈍行列車に、丸2日、丸3日、まさにひたすら揺られる旅である。青春18切符5枚と1週間あげるから、今やれと言われたら困ってしまうが、携帯もラップトップも取り上げてくれたらできるような気もする。

のんきなものである。そして、自由を感じていた。

今回のコロナ騒動で、旅する心が小さくなってはいないが、心配している。どこにも出かけられない夏休みがあったら、今の私はないのではないかと、思うくらい、高校生の私であれば、きっと困り果てていた。

(千葉大学 グローバルプロミネント研究基幹 教授)

[2019年度仁科記念賞受賞者]